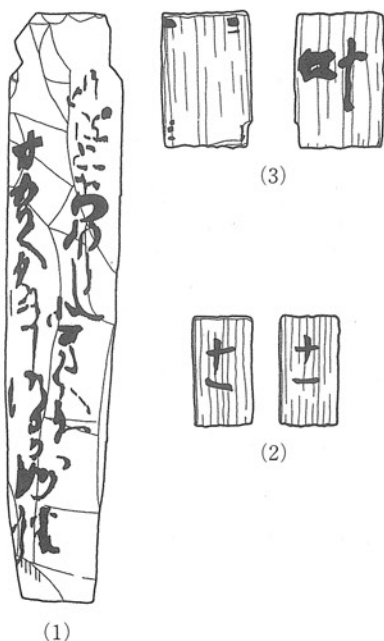




土取り穴

(3) 「 叶 」

・ □ □

□ □

47×32×3 021

(1)は、長方形の材の上端の左右に切り込みが入り、下端はややすぼまる形である。右辺の切り込みは一部破損している。形状からみて、法師へ進上する物品の付札と考えられる。(3)は裏面の四隅に墨痕があり、一から四までの漢数字を記した闘茶札の可能性がある。なお、釈読にあたっては、(1)については網野善彦氏を介して佐藤進一氏にもご教示をいただいた。また、(3)については奈良文化財研

究所の渡辺晃宏氏のご教示を得た。

9 関係文献

鶴岡市教育委員会『鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書(二の丸南辺地点)』
(鶴岡市埋蔵文化財調査報告書一四、二〇〇一年)

(松田亜紀子)

東北地方出土の闘茶札

本号には、山形県鶴ヶ岡城跡と青森県十三湊遺跡で闘茶札と思われる木簡の出土が報告されている。闘茶札としては広島県草戸千軒町遺跡出土のもの(重要文化財。広島県立博物館のホームページで手軽に画像を閲覧できる)が著名であるが、東北地方からも闘茶札が出土していたことが、三上喜孝氏によって明らかになっている(「東北地方の闘茶札と鎌倉」(国立歴史民俗博物館『中世寺院の姿とくらし―密教・禅僧・湯屋―二〇〇二年)。宮城県瑞巖寺遺跡、山形県大楯遺跡、秋田県洲崎遺跡出土の事例である。これらは本誌紹介時にはいずれも闘茶札とは認識されていなかったものである。

今回新たに二点の事例を加えることができたわけで、今後東北地方のみでなく、全国の木簡の中から闘茶札の「発見」が期待できるかも知れない。

(渡辺晃宏)